

感謝箱献金だより

ガラヤのほとり 29 号



神戸教区主教 オーガスチン小林尚明

「小さい者の一人にしたのは」

感謝箱献金に関わる皆さんが、いつもイエス様の愛しておられる小さい人たちのことを心に留めておられることに敬意を表します。この大切な奉仕が神様の祝福を受けられて、益々大きなものになります様にお祈りします。

広島復活教会の牧師をしていた時のことです。秋から春にかけて毎週水曜日（春から秋の間は月 2 回）の夜、ホームレスの人たちの所におむすびやバナナ、ゆで卵、冬は暖かいお味噌汁も一緒に持って訪問していました。また復活教会の東隣の公園で、カトリックの神父さんや信徒の皆さんたちと炊き出しをしていました。

夜回りや炊き出しをしていた時、いつも心に引っかかっていたことがマタイによる福音書 25 章にある天国へ入れてもらえる人たちに語られるイエス様のみ言葉でした。彼らは困っていた人たちに愛の手を差し伸べました。しかし、そのことは困っている人たちにしたのであって、イエス様にしたものではありません、と彼らが言いますとイエス様はそれに答えて『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さな者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである（40 節）』と優しく語られます。何故、困った人たちにする愛の業がイエス様に対してすることになるのか、このことを分からないまま奉仕活動をしていました。

私には、夫を亡くし年取った母がいます。広島から少し離れたところで独り暮らしをしています。体調が悪かったり、気分が落ち込んでくると何かしてあげたいと思っても、こちらにも仕事がありますからなかなかお世話ができません。どうしたらいいんだろうと悩んでいる時に、近所の人から晩御飯のおかずを持ってきてくれた、とか親戚の人が・・・してくれた、という話を母から聞きますと、まるで自分にしてもらったようにありがたく感じたことがありました。その時に分かったのです。イエス様が言われた『小さな者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである』というみ言葉が。私が母を愛しているようにイエス様はこれらの一人一人を愛しておられる。しかし、イエス様は直接助けることができないのだ、ということ。だからあなたの手を私に貸してほしいとイエス様が言われているのだとわかったのです。

感謝箱献金の働きは、このイエス様の手になって働くことです。感謝をもってご奉仕をお願いします。

行ってきました

サイディア・フラハ報告会

荒川勝巳氏

2017年11月4日(土) 北関東教区 大宮聖愛教会

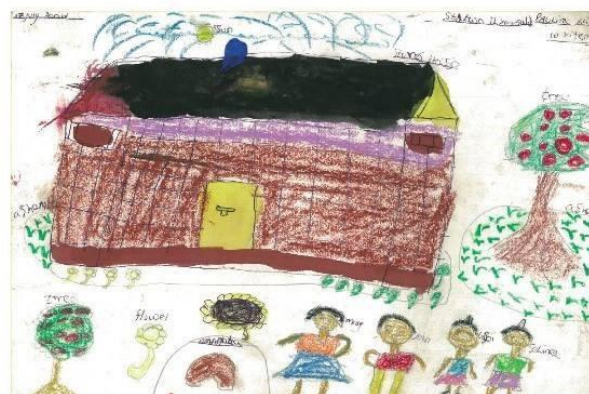
サイディア・フラハは日本人とケニア人が協力して作っていく、ケニアの子どもと女性のためのプロジェクトです。今回は、運営者のお一人・荒川勝巳氏のご帰国にあわせて、現地の報告会が開催されました。

2017年10月17日～11月1日に神奈川で開催された「ケニアの子ども絵画展」で展示された絵を見せていただきました。



☞「この絵はケニアの貧しいシングルマザー家庭の女の子、ロリンによって描かれました。ロリンは高校へ行きたくても家庭にお金がないので行けず困っていましたが日本人で高校支援してくれる方を見つけ出しました。それを告げた2,3日後に描いた絵がこれです。この絵に描かれた眼差しは力強くはないものの、自分の希望のある将来に向けているように思われます。」

「これはポーリン・ラソイが8歳ほどの時に描いた絵 ☞
彼女はマサイ人でシングルマザーの子どもでした。住んでいた家はキテンゲラのはずれにあるマニアッタ(マサイ人が住む伝統的な家で、土と牛フンを練り合わせて作ってある。)で、お母さんと子どもたちの4人で住んでいました。ですから絵にあるようなトタンでできた近代的な三角形の屋根ではありません。その後彼女はサイディアには来なくなり別のプロジェクトで高校へ行かせてもらったらしい。姉は結婚。15,6歳での早期婚か売買婚が多い」との事。



今、彼女たちが幸せであることを祈ります。 (事務局スタッフ 日暮)



「皆さまの支援で購入したクレヨンと紙で絵はがきを描きました。」
絵はがきは大宮聖愛教会に送って下さいました。

荒川氏と子どもたち

リグリマ・ジャパンはバングラデシュの少数民族ガロの女性たちを支援しています。

代表の上澤伸子さんが2017年11月に北部国境地帯に住むリグリマのメンバーを2年ぶりに訪問されました。報告会では現在の治安状態、洪水被害の状況、裁縫トレーニングの様子などのお話を伺いました。

ティーブレイクでは、上澤さんのお土産のちょっと辛いスナック菓子とチャイを頂きました。その後の質疑応答の時間には、参加者の皆さまがガロの女性たちに強い関心を寄せられ、多くの質問が出されました。また、会場ではガロの女性たちの製品、バングラデシュの美しい手芸品のミニバザーがあり、多くの皆さまがご協力下さいました。(事務局スタッフ 永井)



横浜教区婦人会総会

1月24日(水) 横浜聖アンデレ教会

横浜教区婦人会総会に参加し、コア新メンバーの紹介をさせて頂きました。

総会の出席は34教会・伝道所中欠席が11教会・伝道所。横浜教区も「婦人会」を作れない教会が増えてしまいました。



昼食中にはMTS(ザ・ミッション・トゥ・シーフェラーズ)の動画が流され、過酷な労働環境にある船員さん達に毛糸の帽子をプレゼントする呼びかけがありました。

休憩時間と総会終了後にミニバザーをさせて頂き、バングラデシュのガロ族の女性たちが作成した色鮮やかな手刺繍のポーチやバックアフリカのケニアから送られてきたサイディア・フラハの野生動物の顔をあしらった皮のしおりや手芸品、アフリカの子ども達を支援しているアルディナ・ウペポのおいしい紅茶を販売させて頂きました。私の必

需品の敬老乗車証は、ガロ族お手製の真っ赤なポーチに、マスクはサイディア・フラハの横長ポーチに入れて毎日持ち歩いてます。色鮮やかで、持ってるだけで幸せ。見るだけでも楽しくなる作品ばかり。お近くに販売に伺った折は是非手に取ってごらんください。お待ちしております!! (事務局スタッフ 近藤)



できることから始めましょう

支援先のことを学んだり、考えたり、一緒に小さな支援活動を展開しましょう

★ 支援商品の委託販売

- 支援商品の販売で活動資金を増やす努力をしている団体の、紅茶や手工芸品(ブックカバー・巾着・バッグ・布製小物) アクセサリー等を、婦人会の会合や所属教会のバザーなどで委託販売し、収益向上と活動へのご理解を頂くためにご協力ください。

★ 積極的にお話を伺う

- 献金先の代表(コーディネーター)の方に、各地の婦人会に出向いていただき、現地での活動のお話や、支援の先につながっている方々のご様子など、詳しく教えていただくことも可能です。

ご協力、訪問のご希望、その他のご質問詳細につきましては 感謝箱献金事務局 まで

☎ 0475-24-6915

E-mail: kansyabako@gmail.com



教区婦人会からの声

小さな群れの大切な役割

北海道教区婦人会会長 アグネス津川朋子

喜びのうちに降臨節を終え、新役員のもと新しい年が始まりました。

試行錯誤しながら喜びを持つ役員一同努めていこうと思います。北海道のそれぞれの教会の婦人会でも新しい役員が決まる頃と思います。

北海道は広い地域に教会が点在し住まいも教会の近くとは限りません。北海道教区の23の教会のうち婦人会の半分以上が10人位あるいは2、3人の会員で活動しているところもあります。その中で役員を選ぶのは大変な事だと思います。同じ役を何年も務めていたりお互い少ない人数で支えあつて奉仕していることでしよう。婦人会としての集まりを持つことが困難になったところもあります。

2年に1度の婦人会総会への出席者も減つてきており婦人会員の高齢化の現れだと思っています。道北・道東・道央・道南の4ブロックで開かれる会合も婦人だけでなく男性にも集まっていたき楽しい集いになるよう工夫しているところもあります。

遠くても他のブロックの集会に出かけて交流し小さな群れを支えていくことができたかと願っています。仕事を持っていたり小さな子供を育てている若い人たちの参加を促すと共に人生の先輩である婦人たちと若い人がお互い認め合い支え合っている婦人会になるよう祈りつつ皆で考えていきたいものです。

日曜日ごとに「感謝と賛美はわたしたちの務めです」と唱えている私達の大切な役割についていつも考えずべてに感謝の心を持ってそれを型にしていくなことが出来ますよう努力していきたいと思っています。

感謝箱献金事務局 チャブレンから

司祭 エレミヤ・パウロ木村直樹（大宮聖愛教会）

感謝箱献金は、わたしたちの日々の神への感謝の献げ物です。しかし日々、神に感謝することは難しいことです。わたしの毎日を振り返って見ると、感謝の心より不満の方が自然です。情けない話しです。どうして不満が生じるのかというと、わたしの場合、自分の思うように事が進まない、ということがあります。要は、自分中心の世界で生きている「わたし」というものが強くあるのです。確かに自分中心の世界を生きていけば、不満だらけになるのも当然です。感謝の思いを持つということは、一度、この自分という枠を取るところから始まるのだと思います。どうやって自分の枠を取れるのでしょうか。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました」（フィリピ2:6,7）

祈りをとおして、このキリストと一致することが、感謝の心の第一歩です。

「インドからダリットの女性活動家の母娘を招きます」

ニームの会代表 山下明子

キリスト教女性センターの活動の一環である「ニームの会」は、インドの複数のダリット女性団体と連帯してきました。なかでも経済的な支援を含む連携を当初から続けているのが、南インドの奥深い農村で女性の自立とエンパワーのために活動している WOLD (Women's Organization for the Development and Liberation) です。代表もスタッフもダリット（元「不可触民」カースト）女性という希有な運動体です。

WOLD は 2000 年からインド中央政府の貧困女性対象のプロジェクトを利用することにより、ダリット女性が変わるだけではなく自分たちの地域全体を変化させ、それによってダリット差別をなくそうとしてきました。私たちのような外国からの研修ツアーを受け入れられるようになったのもそれ以降です。以前は危険で村には入れませんでした。

ダリットは今も「不可触民」として各村の外れに隔離されて住んでいます。WOLD のスタッフはこれらの村々を訪ね歩いて、自助グループ (SHG) つくりを勧め、グループを訓練してきました。ダリットだけではなく、同じ村の、あるいは村々とカーストをこえた貧困女性の SHG の仲間としての連帯意識を育てました。2000 年からの約 10 年間に地域に約 1000 のグループをつくり、組織化してきました。また、WOLD の成果を知って、外からも複数の NGO が参入してきましたので、全体で 2000 以上のグループが生まれました。これらのグループの活動で地域は大きく変わったのです。ダリットの女の子たちも学校に行くようになりました。

ところが 2010 年代に入ると、WOLD は再び村に入るのが危険になり、他の NGO はすべて撤退しました。一番の原因は、インド政府の自助グループ政策が変わったからです。現在、WOLD はセンター裏の農地を有機栽培に変えて、ダリット女性の暮らしを支えようとしています。しか



右端が、WOLD 代表のプレマ・シャンタ・クマリで、左端が娘のセリーン・ヘマ・マリーニ博士

し、ニームの会が送金してきた姉妹グループの銀行口座も閉まってしまいました。そこで、私たちは WOLD の代表と協働者である娘（医学博士）の初来日を実現することにしました。

インドのダリット女性が抱える問題等について、幾つかの集会を企画して話してもらいます。

2018 年 9 月 29 日から 10 月 8 日の 10 日間です。私が背景説明や通訳の労をとりますので、どうぞご協力をお願いします。



「洪水被害を乗り越えて」

リグリマ・ジャパン代表 上澤伸子

昨年、バングラデシュ北部では雨期の始まりが早く、一部の地域では洪水が起きました。リグリマのグループでいえば、西部のノルチャプラ、ダイリパラ、東部のガランパラ、ボイタカリ、アンチェングリの被害が大きかったようです。裁縫トレーニングに参加したダイリパラ・グループの村では、川が何度も増水したために、田植えを3回して3回とも全滅だったそうです。日本のリグリマでも、現地からの要請を受けて、もっとも被害のひどかったダイリパラ村の2つのリグリマ・グループに、12月から田植えの始まる冬季米の苗と家庭菜園の費用を緊急に支援しました。



浸水した家屋



2017年11月裁縫トレーニング

開催場所にミシンを持ち込むことができなかったのも、すべて手縫いで行いました。でも、これならばミシンのない家庭でも手軽に作れると好評でした。

メンバーの中には、トレーニングで習った裁縫技術を活かして、近所の人から注文を受け、報酬を得るようになった人がいます。リグリマのメンバーが、ちか子先生から教わった技術を人から人へ

伝えているのを知って頼もしく思いました。わたしもさっそく服の仕立てをメンバーに注文したところ、翌日には仕上げてくれました。

(左写真 上澤姉)

裁縫トレーニングでは、感謝箱献金事務局運営委員長からいただいた手紙を参加者のまえて読み上げました。手紙の中にこんな言葉がありました。「自然災害の多い厳しい環境の中で、農業がいかに困難かお察しし、心が痛みます。皆さまのご努力が実を結びますよう、お祈り致します」この言葉が今年の参加者の胸にどれほど染み込んだことかと思ひます。

現地ディレクターのラブリー・ダゼルさんから、日本聖公会婦人会のご支援に対して次のようなメールが届きました。

ステキです！



キリストの姉妹そして友人のみなさま

わたしたちリグリマ・バングラデシュのメンバーも元気になっています。みなさまがリグリマ・ジャパンにくださるすべてのご支援とお支えに感謝を申し上げます。みなさまが長い間助け支えてくださっていることに感謝申し上げます。バングラデシュの女性たちのことを覚えてくださってありがとうございます。

上澤伸子さんのリグリマ女性会への貢献に感謝します。彼女はすでに10年以上リグリマ女性会の活動のために働いてくださり毎年バングラデシュを訪れ、最近では昨年11月に来てくださいました。

わたしたちはみなさまのためにお祈りしています。どうぞリグリマ・バングラデシュのためにもお祈りを願います。

みなさまのご健康をお祈り申し上げます。

リグリマ・バングラデシュ ラブリー・マノーシ・ダゼル

感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。

イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。

私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。

私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられま
すように。

また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。

主イエス・キリストのみ名によって アーメン

お知らせ



3月より感謝箱献金事務局(コア)の連絡先を変更致し、運営委員長宅を連絡先と致します。

今後、今までのように感謝箱献金事務局専用の事務室を設けることは難しいと思われます。

なるべく身軽にする事により、経費の節約・引継ぎもしやすくなると思います。

新 感謝箱献金事務局(コア)の住所・連絡先

〒297-0032 千葉県茂原市東茂原 10-192 永井方

電話/FAX 0475-24-6915

メールアドレスも変わります E-mail: kansyabako@gmail.com

私は、2016 年 10 月に聖公会神学院にて日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局コアのスタッフの方々にご説明いただいたときに初めて感謝箱献金のことを知りました。それぞれの日常生活の中で、「これは有り難いなあ」と感じた感謝のきもちを、献金としてお献げするという小さな行いの一つひとつの積み重ねが、世界の様々な働きを支える一端を担うこととなるという感謝箱献金の活動は、とてもキリスト教的であり、かつ大切な働きであると感じました。日々の小さな働き、徒労とさえ思えるようなことをも、神は豊かに用いて下さると信じる私たちにとって、感謝箱献金はそういった意味でのシンボルであるのでしょう。

日々の生活の中に感謝を見い出すということで思い出したのは、今年度の夏季実習での体験です。私は、大阪府堺市にあります社会福祉法人サワリという、精神障害を抱える方々の為の就労継続支援の施設で実習させて頂きました。そこで私の実習課題の一つは、利用者さんのストレングス(強み)を一日ひとつ見つけるということでした。利用者さんのできないことや、つらそうなことはすぐ目につきますが、いいなと思うところや、ここがこの人の持ち味だな、強みだなと思うところを見つけることはなかなか容易なことではありませんでした。しかし、この人の強みとは何だろう、という視点も持つことは、普段自分がいかに何かが「できる」ということで物事を評価しているということに気づかされることとなりました。そして私は、いま「生きて在る」ということに喜びや感謝を感じているではないか、ということ思い出させてくれました。

利用者さんも、1 日の仕事を終えるにあたり、自分の 1 日よかったと思うことをメモに書き残します。「今日はサワリに来て良かった」、「今日もマイペースで仕事が出来て良かった」。このような言葉は、しんどい状況の中にあっても、利用者さんは喜びや感謝を見い出しているのではないだろうか。私にはそのような言葉にきこえました。

辛く苦しい状況にあって、感謝するということに困難を覚えることはあるような気が致します。しかしながら、今ある現実から少し視線を外し、顔を上げてみて、感謝箱献金の小箱に目をやるとき、何か新しい気づきを与えられるときがあるのではないのでしょうか。

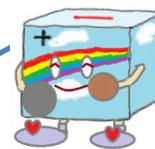


プロフィール

出身：東京都

経歴：大学卒業後、海外旅行専門の旅行会社で添乗員として働き、その後脱サラして、ソムリエの資格を取得。2004 年に独立、港区浜松町にフレンチビストロを開店。10 年続けた店を閉め、聖公会神学院に入学。

趣味：食べるものと飲むこと。



編集後記

「ガリラヤのほitori」29 号をお届け致します。

原稿をお寄せ下さいました皆様に感謝申し上げます。

今回もまた管区事務所に多大なご協力を頂きました。感謝でございます。

ご案内の通り、感謝箱献金事務局(コア)の連絡先を変更致しました。

感謝箱が必要な場合は、電話、FAX でご注文下さい。ハンドブックとともにお送り致します。

2012 年より横浜教区横浜聖アンデレ教会の一室を感謝箱献金事務局として使用させて頂きました事を感謝致します。 永井眞由美